

平成15年9月21日（日）13:30～16:00 りゅーとぴあ劇場

## 新潟県民文化祭2003「新潟の文化を考えるフォーラム」

中野孝次・北嶋藤郷 対談録

近藤 皆様こんにちは。今日はようこそ新潟県民文化祭2003「新潟の文化を考えるフォーラム」にお越しくださいませ、ありがとうございます。さて、今日は作家の中野孝次先生、そして敬和学園大学教授でいらっしゃいます北嶋藤郷先生をお迎えいたしまして、「現代人の生き方にとって良寛とは何か」を語っていただきます。本日は三部構成になっています。まず、お二方より、それぞれの良寛像をお話しいただきまして、二部は対談、三部は質問コーナーになっています。質問コーナーでは、その場で手を挙げていただいても結構ですし、一部と二部の間に15分間の休憩をお取りいたします。その時に、手を挙げるのは恥ずかしいわ、という方は受付にお越しになり、そして質問項目を紙に書いてください。本日、全て終了いたしますのは、だいたい4時頃を予定いたしております。それでは早速、中野孝次先生と北嶋藤郷先生をお呼びいたします。どうぞお入りください。

（拍手。中野氏、北嶋氏入場。）

近藤 それでは中野先生から、良寛像を語っていただきたいと思います。



中野 このところ僕はしばらく人の前で話したことがないんです。今日は久しぶりに皆さんの前で話すということで、皆さんに差し上げるお土産の言葉を考えてきました。

良寛については、私は前に『良寛の呼ぶ聲』、『風の良寛』、『良寛に会う旅』と三冊本を書いていて、ですから今日

話すこともみんなその中にあるんですけれども、私はいつもこう思ってるんですね。良寛の不思議な点というのは、今日も皆さん大勢お集まりですけれども、今の日本には良寛を慕う人が非常に多い。これは日本の七不思議の一つと言ってもいいと思うんですね。どうしてかという、良寛というのは現代の我々の生き方と、全く正反対の生き方をした人です。我々は例えば、非常にたくさんの物を持っていますが、良寛は何も持っていないんですね。わずかな道具と、粗末な住処・庵、着物と、そのくらい。良寛という人は何も持っていない。それに比べて我々はあまりにもたくさん物を持っていますね。物を持っている

だけじゃなくて、生き方としても、計画を立てて、将来いい生活をしようと今を犠牲にしてせっせと働いています。ところが良寛は毎日禅で、将来のためにという生き方は全然しない人ですね。つねに「今ココニ」を生きている。いろいろそういうふうにと考えると、良寛という人は、今の日本人の生き方と全く正反対の生き方をした人です。所有も、所属も捨てて、ただ一人の人として生きている。その良寛がどうして今、我々にとって慕わしく、懐かしく思える人なのか、ということをお前は本当に不思議に思ってきました。僕が書いた良寛の本では、結局その不思議とはどういうことか、を考えるために書いてきたわけですが、それで、今まで考えたことをまとめてきました。

良寛が我々に訴える一つの理由はですね、過去、1960年頃か1970年頃から日本は高度経済成長に入って、たくさん物を作り、物を売り、物を買ひ、という時代になったんですね。この間、皆さんが思い出せば分かると思います、皆覚えがあると思うけれども、あの当時の日本人というのは物欲のかたまりみたいなもので、物を追って、物を追って止まないわけですね。隣が大きなテレビを買えば、うちはもっと大きなテレビを買おうとする。隣が新しい車を買えば、もっと新しい車を買おうというふうに。そのために物は欲しがる、カネは欲しがる、というような生き方をだいたい日本人は1970年頃から1991年のバブルが崩壊するときまでやってきたわけですね。だから我々の生活は一見非常に豊かになった。日本の二千年の歴史、千何百年の歴史の中でも一番物の豊かな時代ではないかと思いますが、その豊かになった代わりに何か大事なものを失っちゃったんですね。それは、何か。その失った何かを、どうも良寛が持っているらしい、ということなんですね。

その高度経済成長の間に、日本人は物を持つとうとして働きに働いて、テレビは持つ、車は持つ、冷蔵庫は持つと、昔ならば大金持ちくらいだったものをほとんどの日本人が持つというような、それが高度経済成長を支えたわけです。そのいろんな物を持って、そのあとバブルが崩壊して、経済が減退したときに省みると、こんなにたくさん物があるのになぜ我々は少しも豊かな感じがしないんだと、安心しないんだと、まだ何か不安でもっと欲しがる、というような気持ちが日本中でしています。1991年から今日までの12年間という間はその反省の時期で、反省の中に良寛というのが我々と反対の部分の人として浮かび上がってきた。

それで僕はここで今日は皆さんに、良寛というモデル、あるいは模範というものは、我々に何を訴えるか、というのを五つ考えてきました。これは今日始めて発表するわけですが、皆さんへの五つのお土産というふうにご覧ください。

良寛はもちろん自分からは、皆さんこうしなさいよ、なんてことは一切言わない人ですね。命令もしない、説教もしない、何もしない人ですから。だから良寛はこんなこと言っていないんですけれども、僕は良寛の生涯を通して書いた詩や歌を読むと、良寛はこういうふうなことを言っているんだと思うんですね。

第一は「物欲を捨てる」ということですね。良寛は実際に家を出て以来、生涯どこにも所属しない、本当ならばお寺の住職ぐらいになろうとすればなれたがそれもしない。一生粗末なところに居を借りて住み、その日常生活というのは非常にわずかな物しかない、無所有に徹して自分の欲望というのをどんどん捨てていく人ですからね。それで良寛自身はそういうことを詩の中にうたってますね。「欲無ければ一切足り、求むる有りて万事窮す」ということを言っている。これを実際に良寛は一生涯やったわけです。それはなかなか

か真似しがたいんだけど、それは必要なんです。

というのは、単に「捨てる」のは何のためかというのはですね、これはちょっと難しいけれども…宇宙全体には生命というものが満ち溢れている。例えば命というのは、空中に電磁波がバァーっと働いている。その電磁波と同じようなものが宇宙では充ち満ちている。それは風を起こし、雨を降らし、水を流し、地球の大きなもととはそこから出ているんですね。その大元おおもとのものを昔の人は神と呼んだ。あるいは仏性と呼んだ。仏様。あるいは老子タオのように道と。そういうものを人間というものは、鳥とか、木とか、獣けものとか、そういうものと同じように、その命を、神であれば神の性質、「神性」が人間の中に生まれつきあるんだと考えたわけです。また、仏性というものが人間の中にある。それを輝かして、ちゃんと生かすのが人間の生涯の務めであるというふうに、昔から、二千年前から賢い人は言っているんですね。

僕はこの間、ローマに二千年前に生きたセネカという人の文章を読んで、少し物を書きましたが、セネカが二千年前に言っていることは全くそういうことなんです。人間の心にある神性、それを生かさなければならぬ。それが幸福になるもとである。それを磨くためには、物欲というのは妨げとなるんですね。物欲が神性を隠してしまい、見えなくしてしまう。だから、神性が輝かなくて、互いに争ったり、戦争をし始める。そういう心の世界になってしまう。そうならないため、物欲を捨てる。物欲を捨てるというのは、自分の中の仏性、あるいは神性を輝かせるためだ、というのが良寛の考え方で、と僕は思うのです。

それから良寛の教えの二番目は、「今の為ために生きよ」ということ。「今の為に生きよ」ということは、「明日ありと思うな」ということですね。それは、我々はいつも自分はいつまでも生きられるような顔をして生きていますが、そんなことはない、明日は無いんです。死というものは常にそこに迫っているということは、日本人は昔から切々と自分に言い聞かせてきた。『徒然草』にもそうあるんですね。「若きにもよらず、強きにもよらず、思ひ懸けぬは死期なり」[第三百七段]。今までの長い時間は、死のためだということなんです。死は常にある。明日はない。ということのためにも、今を大事にしなければならない。そして、それだけじゃなくて、今のために生きるということ、人間が本当に生きる時間というのは、「今ココニ」という時しかないんだということなのですね。だから禅の言葉では、「即今」といいますが、"here-now"だけが本当に人間が生きる時間としてある。だから、時計の時間、暦の時間、そういうものによって生きてはいけない、ということを良寛は言っているんですね。で、それは我々の普通の「時間」の考えだと、時計の時間とか、暦の時間、カレンダーの時間、と出てきますね。昨日があり、明日があるという。だから例えば、今年は2003年であると西暦でいう。つまり、時間というのはとんでもない過去からとんでもない未来まで、棒のように、飴ん棒のように延びていく、と考えるのが、普通の時間の考え方ですね。

そう考えると、どういうふうになるかというと、例えば僕ならば1925年に生まれて、今年2003年ですから、あと2004年ぐらいに死ぬっていったら、そこまでの短い間しか生きられない、というふうにしかならない。はかない。つまらない。そうじゃないんです。自分が「今ココニ」生きている、という時が全部です。そして明日はない。過去もない。それから今、"here-now"という時が、永遠…さっき言った神とか、仏とか、道とか、永遠とい

うものに繋がっているわけです。それを鈴木大拙は"absolute now"と言っていますが。「絶対的な今」ですね。この「今」は、宇宙と繋がって、永遠に繋がってれば、それでもう全部が成り立っているわけです。何も要らない。だからそういうふう生きるというのは良寛の第二の非常に大きな教えなんです。

それから三番目には、今のことと一緒にになりますが、「絶えずゼロの状態に身を置く訓練をせよ」ということ。プラスのままに置いてはいけない。ゼロに置く。これはどういうことかという、良寛の生活を考えれば分かりますが、毎日托鉢にいったお米をいただく。それでもって暮らしたんですから常にゼロですね。自分の家は、暖房もなければ、冷房ももちろんない。ゼロです。寒さにも耐え、暑さにも耐え、空腹にも耐え。そういうゼロに置くから、ちょっとしたプラスがありがたい。何か食べ物を恵まれたとか、長い冬が去って春が来るとか、そういう、ちょっとしたプラスが喜びになる。それにはゼロに身を置く必要があるんですね。

ところが現代の日本人はどうかというと、ゼロに置くことがない。プラスの上にプラスがたんまりある。今の子供が一番いい例です。生まれたときから周りに物がたくさんあって、何でもあるから、全部物を欲しがる。だから本当の意味での食べることの喜び、食べ物を与えられる喜びを知らない。大人だってそうです。テレビを見てご覧なさい。僕はテレビというのは見ないからあれだけど、一日中食べ物の番組ばかりやっているでしょう。民放といわずNHKといわず。日本人はいつからあんなに卑しくなったのかと思うくらい。食べ物の番組ばかり。美味しい物を見せる。珍しい食べ物。馬鹿じゃないかと思うね。(笑)そういうふうプラスの上にプラスをやったって、味は分かりやしないんです。「空腹こそ最良の料理」というように、味が一番良いのは、何もない、空腹が一番。そういうもんですね。だから「ゼロに身を置け」。クーラーとか、ケータイとか、テレビとか、生活を快適にばかりしないで、暑さにも耐えて、寒さにも耐えて、そういうふうにするのが必要。「ゼロに身を置く訓練をせよ」ですね。

それから四番目は「身を『閑』の中に置け」。閑、何もしない状態に置け。これは非常に重要な教えで、この間、私は『『閑』のある生き方』という本を出しましたが、それも同じことを言っていますけれども、つまり人間というのは社会で生きていると、世の中とのつきあいばかりを考えるようになる。気持ちが外を向いている。それはどういう働きかというと、外と対応するための人間の能力だけが活発に働いている状態です。ところが人間にはもう一つ、自分の中にある「自然」の部分があって、そしてそれは心で、その心の声を聞く必要がある。自分になるために。それを聞かない人は自分になれない。「身を『閑』に置け」。例えば座禅はそのためなんですけれども、人間の身体の中で全身を動かしているのは血ですけれども、この血液だって、人間は自分の自由にできませんね。人間が自由にできるのは身体の20%ですね。頭で、自分の意志で手を動かしたりとかそういう。あとの身体の中の全部のそういう動きというのは、自然がやっているわけですから。早く血液流れろ、といったって流れやしませんね。80%は自分の自由にならない。それが身心の一つになった部分、人間の大事な部分です。腹もそうです。胸もそうです。その中に流れているいのちを感じるためには、外との関係を断って、自分一人になって、自然の中にこもって、『閑』に身を置け」というわけです。だから良寛さんは、ずっと徹底して「閑」にしていたんですね。

それから最後の五番目は、先ほどの「内なる声を聞け」というのと同じですけど、「自分が考えて正しいように生きよ」。世間並みに生きるな。今の日本人はどうかというと、高度経済成長以来、みんな右へならえで、みんなと同じことをしなければ排除されるような空気が日本全体に充ち満ちていますが、そういうんじゃないんです。だから今、銀行で不祥事を起こしたり、雪印が事件を起こしたり、そういう度に出てくる経済人とか財界人とかいろんな人をみるとこんなつまらん連中が会社でやってきたのかと思う。みんなつまらん顔をしている。独自の顔をしたのが一人もない。みんな右へならえで、右へならえの中でうまくやってきたのが社長になっているから。独自の考えが何もない。自分の判断でこれがいいか、悪いかというものを判断し、そしていいことならやるという勇氣を持ってやる、という人が見失われているものがあるね。

良寛という人は出雲崎の名主の家に生まれて、その気ならば名主のせがれとして結構な生活を送ることができた。それが自分は、自分の心の声に従って生きようと決心したんですね。それで仏道の修行をして。修行した後も、どこかに所属すれば楽ちんになる、坊主になれるかもしれないけどそれもならない。ひたすらただ自分という人物だけで生きた人です。

この五つのことは、今日は私は皆さんにいっぱい話そうと思っています。だから後で話をするときにこの五つについてまたもうちょっと詳しく話します。僕の話はそういうことで…。

近藤 分かりました。ありがとうございます。また後ほど「対談」のところでこの五つについては掘り下げて伺っていきたいと思いますが。さて、それでは今度は敬和学園大学の北嶋先生から、ご自身の良寛像を語っていただきます。

北嶋 ここに持ってききましたけれども、『清貧<sup>せいひん</sup>の思想』をはじめ、中野先生の良寛関係の著書に加えて、雑誌『良寛』、『天上大風』のエッセイ<sup>エッセイ</sup>、あるいは『禅の風』に掲載された対談「今を生きる良寛」などを拝読<sup>はいどく</sup>して、身の程も顧みず、今ここにあるわけであります。

#### (良寛の生き方)

近年、シンプル・ライフの提唱者たちの「暮らしは貧しく思いは高し」という言葉をよく聞くようになりました。良寛と時代がほとんど重なるイギリスの詩人、W.ワーズワースは「低く暮らし、高く思う」(Plain living and high thinking)と詩の中で歌いました。

アメリカでもこのシンプル・ライフの追求は、古くピューリタンの時代から一つの伝統をつくってきました。「暮らしは貧しく思いは高し」は、彼らの理想でありました。良寛が60歳の時に生まれた、アメリカの哲学者D.H.ソローは、コンコードの郊外にあるウォールデン湖畔の森の中で、自分で小屋を建て、独居の生活を営みました。自由と独立を妨げる人生の要素を一切排除し、人生の根本的な事実のみに直面し、自然が教えてくれるものを自分が学び取れるかどうかを確かめる生活実験でありました。

ソローは『森の生活』(Walden)という本の中で「私は人生でないものを生きたくはなかった。生きるということはそれほど<sup>さほど</sup><sup>シンプル</sup>貴いのだ」、「われわれの人生は瑣末<sup>さまつ</sup>なことによって無駄に費やされている、単純化せよ、単純化せよ」と説くのであります。この思想は、ロ

シアのトルストイやインドのガンジーなどにも影響を与えました。1960年代から1970年代、アメリカの機械文明が行きづまり、反体制文化の運動が起こると、その担い手であるアメリカの若者たちの間でこの書物は、バイブルのように読まれました。ソローの生き方は五合庵時代の良寛の生活にも呼応するものがあるように思います。

山かげの 岩間を伝ふ 苔水の かすかに我は すみわたるかも

これは五合庵時代と推定される良寛の和歌ですが、大自然に生かされている彼の生活全体が見えてくる名歌であります。「山かげの岩の間からしみだす苔水のように、かすかに自分はこの世の日々をすごしている」というのです。しがらみの多い俗世を離れて、自由に、気ままに、心の世界にのみ優游と生きた、良寛の原風景を垣間見ることができる歌であります。

同じ時期に、良寛の人生観が明確に示されている漢詩として、次のようなものがあります。俗世の煩わしさを避け、自由人としての志を高く掲げ、欲望をとりはらって、清貧に生きていこう、と詠んでいます。

無欲一切足 欲無ければ 一切足り  
有求万事窮 求むる有れば 万事窮まる  
…  
独往伴麋鹿 独往して 麋鹿を伴とし  
高歌和村童 高歌して 村童に和す  
…

(欲が無ければ、あらゆることに満ち足りる思いになるが、欲を出すとは何事においてもうまく行かず、苦しい思いをする。…独りであるから、自由に出かけて鹿を連れとし、大きな声で村の子供たちの歌声に合わせる。…)

江戸時代の豪雪地帯越後の冬は、鈴木牧之の『北越雪譜』にも記されているとおりでありますが、良寛にとって五合庵の冬ごもりは、いかに厳しく辛いものであったか、想像すらできません。「雪は五合庵を覆って一個の繭たらしめる。そして繭の中にひっそりとひとり『無能』の人を置く」と書いた歌びとがいました。純白な雪と墨染め衣の黒と、白と黒のコントラストは見事な表現です。「無能」とは「働きがない」という意味で、良寛詩の「無能飽酔す 太平の春」(無能飽酔太平春)からの引用であると考えます。目に見えない、心の世界でのみ生きることが、良寛の生涯のテーマでありました。彼は田畑を耕し稲を作ることはしませんでした。しかし、実りの秋を心から喜び、黙々と稲を刈る年老いた農夫への感謝と同時に、「無能」への自責の念が読みとれる、次のような歌も残されています。

秋の雨の 日に日に降るに あしびきの 山田の小父は 奥手刈るらむ

良寛は春の到来をどんなに待ちわびていたか、そして子供たちと再会することをどんなに楽しみにしていたか、次の「乞食」という漢詩を見れば明らかです。

十字街頭乞食了  
八幡宮辺方徘徊  
児童相見共相語  
去年痴僧今又来

十字街頭 食を乞い了わり  
八幡宮辺 方に徘徊す  
児童相見て 共に相語る  
去年の痴僧 今又来ると

(賑やかな町のほとりでの施しを求め終わって、ちょうど八幡宮のあたりをぶらぶらしていた。すると子供たちがお互いに顔を見合わせ、言いかわしている。去年この町に来ていた変わり者の坊さんが、今年もまた、やって来ているぞと。)

場所は三条か与板といわれていますが、場所を特定しなくても鑑賞できるものです。托鉢はすでに終わり、鉄鉢は満ちています。おまけに、気のいい山田屋の女中およしさんから振る舞い酒も頂戴しているかもしれませんね。それでも良寛は上機嫌で帰る気になれない、何か後ろ髪引かれる思いがあります。そう、子供たちにまだ会っていないのです。それで八幡宮の界限をいつまでもうろうろして、子供たちに見つかります。これが良寛の春の始まり、といえます。子供たちは、自然界に属している良寛と、人間界(世間)を結ぶ大切な役割を果たしているのです。

良寛は、子供たちとただ遊び暮らしていたのではないのです。義務教育制度や保育園も無い時代でありますから、時には字を教え、数の手ほどきもしました。親は安心して、子供を良寛に託しました。そこで良寛を、日本の保育所長第一号にする人もいます。良寛は托鉢に回ってお爺さんやお婆さんの愚痴話を聞いたりしてあげました。これは聴聞介護といって、まさにボランティア活動の先駆者と見てよいでしょう。解良栄重の『良寛禅師奇話』には「又能ク按摩シ、又灸ヲスフ」[第二十二段]と書かれています。肩こりや腰痛など、良寛が施すお灸やマッサージによって回復した、幸せな村人たちもいたことでしょう。良寛は老人介護の努めもしたのです。

歌人・吉野秀雄は「良寛和尚讃称」の中で、次のような短歌を歌っています。

蚊帳の外に 片足延べて 生きの血を 夜さ夜さ庵の 蚊に施しき

これこそまさに日本の献血第一号だとする人もいます。また、良寛は69歳で国上山をおりて、島崎の里の木村家に身を寄せますが、これなどは「成年後見制度」の先取りであるかもしれませんね。

(良寛の考え方)

良寛は出雲崎の町名主の長男として生まれ、紆余曲折の後22歳で出家、備中玉島の曹洞宗・円通寺にて、大忍国仙のもとで11年間、厳しい修行をしました。若き日の良寛は、実践より理論の人であったと考えられます。ある日、良寛は「いかなるかこれ、和尚の家風」(師よ、第一の訓えは何ですか)と問いを發します。国仙は「一に石を曳き、二に土を搬ぶ」と説き、修行の根本は労働であることを良寛に教えました。「印可の偈」(修了証書)を国仙が授けたのが33歳。それから諸国行脚の時代が始まりますが、土佐滞在や長崎での清国渡航失敗説などがあります。この時代の良寛の遍歴修行の記録は残っていませんので、

つまびらかではありませんが、この空白の時代に、壮大なロマンを感じたりするものであります。

良寛の時代は、近世幕末期にあたり、キリシタン禁制<sup>てらうけだんか</sup>の寺請檀家制度による、仏教の過保護と墮落の時代でありました。仏教のあるべき姿にこだわる良寛の抵抗精神が、寺を本拠としない「僧に非ず、俗に非ず」(非僧非俗)のスタンスを取らせ、名利に近づかず、生涯清貧を貫いた人といえます。良寛は説教で人々を説くのではなく、自ら実践行に徹した人でありました。

良寛の烈々たる批判精神は、「僧伽<sup>そうぎや</sup>」という52句の詩の中で、詠み込まれていますが、同門の若い僧侶に対して修行の心得を説いて、

縦入乳虎隊	縦 <sup>たと</sup> え	乳虎 <sup>にゅうこ</sup> の隊に入るとも
勿踐名利路	名利 <sup>みょうり</sup> の路を	踐 <sup>な</sup> むこと勿れ
名利纔入心	名利 <sup>わづ</sup>	纔 <sup>また</sup> かに心に入らば
海水亦難澍	海水 <sup>そそ</sup> も亦	澍 <sup>また</sup> ぎ難し

と記して、この世でもっとも恐ろしいものは、名利を求める心である、と戒めているのです。

良寛の書・詩歌などの芸術は確かに秀逸であります。良寛の人間性や宗教性は、その上を行くものであります。「山中独居」「只管打座」「托鉢行脚」の戒律を、わが国の禅僧の誰よりも厳しく実践しました。良寛の最大の関心事は、仏法の実践と衆生済度であったことは間違いありません。権勢や企みから遠く離れ、財産、名誉などの人心をまどわす全ての欲望を捨て去りました。無一物の良寛は、現代人が忘れ去ろうとしている、清らかで美しい心、人に対する思いやり、誠実味あふれる人間性を実に豊かに持っていました。良寛は風雅の友として、詩歌・書などの芸術の境地にも没入し、優游とした人生を送りました。人生の実りの季節ともいふべき最晩年には、貞心という40歳も歳の違う尼さんが訪ねてきて、最期を看取ることになります。うら若い尼僧の胸をときめかす魅力を老僧良寛は持っていました。

(おわりに)

20世紀は「ひたすら所有価値を追求した戦争の世紀」であった、とよく言われます。日本は資源を確保するという大義のもと、戦争という手段に訴えましたが惨敗しました。苦難から再出発して58年、日本人は「敗北を抱きしめて」(embracing defeat)、今までとは異なる手段で経済成長を追求しました。欧米人から、兎小屋に住み、働き蜂のように働くエコノミック・アニマルである、とまで言われ、冷ややかな眼で見られたりしましたが、高度経済成長を達成し、立派な成功を取めたかにみえた。その結果、バブルは崩壊し、その上に自然環境破壊まで招きました。1991年にバブルがはじけてみると、あの物欲にしがみついた、集団的な熱狂の45年間は何であったか、と思わざるを得ません。暮らしは確かに豊かになりましたが、しかし心は貧しい時代になってしまいました。

価値観の変換期にあたる今こそ、「所有価値」(to have)から「存在価値」(to be)に軸足を移す時であると考えます。「存在価値」とは、「所有価値」に対置されるべきもので、



人間や自然をあるがままに受け入れることに価値を見出すということでもあります。

私は学生100人に「良寛さんアンケート」に答えてもらいました。「あなたにとって、良寛とは何か？」という項目の一つの回答をここでご紹介します。「何も持たず、何も<sup>いつく</sup>こだわらない。あるがままを受け入れ、全てに感謝する。今ここにあるものを大切に、慈しんで生きることの素晴らしさを良寛さんは教えてくれたような気がする。「飽食の時代」と言われる現代では、何が大切で、何が必要なのか、もはや自分でも分からなくなっている。そんな時代だからこそ、良寛さんの思想や行動に感銘を受ける人が多いのだろう。彼こそは、私たちが忘れていたものを思い出させてくれる。人や物や情報で溢れかえっている社会で育った私たちに、本当に必要なものは何かを教えてくれる存在だ。それと同時に、昔の人々がどんな暮らしをして、どんな人付き合いがあったか、などを良寛さんを通して知ることができる。人と人との繋がり<sup>つな</sup>がりが、どんなに温かいものであるかを感じることができる。私は、今の若者や子供たちに、良寛さんの生き方を知って、感じてほしいと思う。同じ越後の空気を吸って、実在した人だからこそ、説得力があるのだ。そして、自分と同じ土地に良寛さんという人物が生きていたことを誇りに思う。」

良寛の生き方と考え方は、我々からみれば「ユニークの中のユニーク」といえるものがあります。しかし、今こそ良寛を「21世紀の賢者」として中央に押し出してゆくべき時であろう、と考えます。全てのこだわりを捨てた、良寛の無一物の生き方は、現代人のそれとは対極にあり、とうてい真似などできるものではありません。しかし、我々の心の持ち方を良寛に学ぶことは、不可能なことではないのです。現代の良寛ブームにのって、地球に名をあらわす<地球時代の良寛>になってほしいと念願するものであります。

日本は、「和」の精神に深く支配された文化であり、社会である、と言われます。しかし、良寛没後の日本は、近代化によって得たものも大きかったが、同時に失ったものも計り知れないほど大きかったように思います。我々は、注意深く良寛の言葉に耳を傾け、良寛から先端的な未来メッセージを読み解き、これからの世代を担う若い人々に伝えていくことが、今ここに縁あって一堂に集まった、我々地球市民の使命ではないでしょうか。20世紀の後半が物質的繁栄をひたすら追求した世紀であったとすれば、21世紀は、心の充実を求める世紀になるであろう、と思います。良寛が示す生き方と考え方のモデルは、決して過去のものではありません。むしろこれからの時代の指針であるように思えるのです。「総合的学習」や「生涯教育」の局面においても、我々が良寛から見習うべきものは実に多い、と確信して、私のスピーチを終わります。

ご清聴ありがとうございました。

近藤 ありがとうございました。大学生がそんなふうに良寛さんを捉えていたというのは大変興味深いお話でした。さて、お二方にそれぞれの良寛像を語っていただきました。ただいま2時15分です。これより15分間休憩をいたしまして、いよいよ対談に移ります。

なお、この15分の間に、受付にて皆様からのご質問をお受けいたします。後ほどの質問コーナーでお二方に意見のある方、お手を挙げていただければ、それでよろしいのですが、ちょっと恥ずかしいわ、という方は受付の方にどうぞお越しください。では、これより15分間の休憩をいたします。

## 【休憩⇒第二部】

近藤 お待たせいたしました。それでは第二部「対談」ということなのですが、先ほどお二方にいろいろお話をいただきましたことを踏まえまして、お話しを進めてまいります。

さて、中野先生、北嶋先生に良寛さんを語っていただいたんですが、お二人ともずいぶん熱い語り口でした。私にとりましては、良寛さんにお二人が恋をしているのではなからうかと思うほどに。(笑)

お二方の経歴を見せていただきますと、中野先生はドイツ文学者でいらっしゃる、そして北嶋先生は、英米文学者でいらっしゃる。その、全然フィールド違いのお二人がなぜ良寛さんに惹かれるようになったのか、このあたりからお話しを伺います。

中野 うーんと…どうしてだろうなあ。それはねえ…外国の文学を読んだ目で日本の古典を読む、という体験をしたいと思ひましてね、そうすると国文学者が日本の古典を読むのとはいろいろな角度から大分違いが出るんです。そういうふうにして僕は日本の古典を一から読んだんですね。『徒然草』から、『方丈記』であるとか、道元であるとか、良寛とか。東洋の知恵と言いますかね、東洋の文化というものと西洋のものとはちょっと違うんですね。根本的に違うと言ってもいい。東洋のは、例えば「無」です。「有」に対して「無」でしょう。持たないということをも無所有というんですね。老子でもそうです。それから、人と合わせるといよりも、<sup>しりぞ</sup>退いて自然の中で生きるといようなことを日本ではしている。西洋では自然は征服するものと考え。一方、木とか鳥とか獣だって自分は同じだ、という考え方が、日本も含む東洋の考え方ですね。そういう東洋の文化というのは結局一言で言うと、西洋のと一番違うのは、西洋は主観と客観とが分離するところからできているんですね。自然というのは客観的なものであって、自分の向こうにある。だからそれを分析して、認識するというのが西洋の考え方。そのために科学というものが発達したわけですね。東洋は逆に主観と客観の差を無くしていく、そして大元の一つ、「一」といふところに行くんですね。老子でもそうです。それから、良寛もそうです。「一」といふのはつまり自分の世界であって宇宙と一つになったところ、鳥もみんなが一つの命として生きているところ。それを大事にしていく。それを知るのは頭(マインド)の働きじゃなくて、ハート(心)の働きっていかね。…良寛もそうですけれども。

近藤 それはおいつつくらしいの時ですか？

中野 50、60過ぎてからですよ。若いうちは分かんないですね。

近藤 もうちょっと若いうちに知っておきたかったな、ということとは。

中野 いやー、頭で知ってても分からなかった。(笑)それは。そういうものってあるじゃないですか。やはりね、若いうちはしょうがない。というのは、若いうちは競争心が非常に強いでしょう。人と争ったり。これがあるうちは必ずダメですね。

…それはね、良寛というのは全く争わない人でしょう。争うということがない。一番僕

は良寛で驚いたのは、良寛が長い放浪生活から越後に帰ってきて、郷本<sup>ごうもと</sup>というところで塩焼き小屋に住んだんですね。そしてその時に、良寛が托鉢に出回っていただいていたその日食べるものを乞食にあげちゃうとか、着る物を誰かにやってしまう、そういうような生活をして、しかも中では座禅をしたり、詩を書いたりして非常に高雅な生き方だというふうに皆感心した。ところが良寛の塩焼き小屋が焼けちゃったんですね。そしたらあの乞食坊主がやったに決まっているって言って、良寛を捕まえてきて、みんなで砂の中に埋めようとした。良寛は何をされても抗<sup>あらが</sup>わない。なすがまま。それで医者<sup>いしや</sup>が来て、何だこれはと。私が酒代を出すからここは勘弁してやってくれ、と良寛を助ける。そして良寛に「どうしてあんたは逆らわない？」と尋ねたところ、良寛は「どうしょば」と答えた。そう思い込んでいる人はどうしようもない。徹底した無抵抗です。一生涯そうなんですね。子供たちと一緒に毬つきをして、そういうふうに大人が子供と一緒に遊んでいる。それで、それを前から見てて、苦々しく思っていた農民が通りかかって「お前さんは何でそんなことをしているんだ。」と尋ねたが、良寛は頭を垂れて答えない。そこが面白いですよね。何も抵抗しない。分かる人には分かる。分からない人には分からない。そういう世界に良寛は生きていたという話ですね。

近藤 同じことを是非、北嶋先生にも伺わせていただきたいです。英米文学者である北嶋先生が、良寛に惹かれるというのは、どんなところでしょうか。

北嶋 今、中野先生がおっしゃられた、郷本の空庵時代に、小越仲珉<sup>ちゅうみん</sup>という医者に助けられた時、良寛さんが「どうしょば」と答えた逸話は私も好きなんです。人間の生まれ育った故郷は心の原点でありますし、私は佐渡の南部郷の出身なものですから、良寛さんとは地縁があると思っています。記憶<sup>きこ</sup>を辿れば、祖母が糸車を押す横にちょこんと座って、良寛の逸話や和歌を聞いたことを覚えています。「良寛の歌は格調が高く、調べは豊かで、読者の心を澄ませる」と貞心尼は書いていますね。そのとおりだと思います。声に出して読み、耳で聞き、心で捉える。そういうふうになっているうちに、良寛さんの歌の魅力にとりつかれたような気がします。良寛さんの詩歌は、外国人にも通じる魅力と包容力を持っていますね。

それで、今月になってから思い立って、良寛の母の故郷の相川を訪れました。「良寛の母の碑」を拝んで「たらちねの母が形見と朝夕に 佐渡の島べをうち見つるかも」という歌を口ずさんでいるうちに、「良寛さんは、母の実家を訪ねたことがあったのではなからうか？」と思いました。その時期は、名高い「鰯<sup>いわし</sup>の逸話」のある幼少<sup>こうしょう</sup>の頃と推測しました。

もう一つはですね、私は普段忙しくしていて、一切の所縁<sup>ほうげ</sup>を放下することもかなわず、アメリカの文学と、文化の底辺を駆け巡っているような人間であります。いったん外国文学をくぐり抜けてみて、気がつけば自分は日本人としてのアイデンティティ (identity)、つまり「自己証明」は何であるのか、己<sup>おのれ</sup>の精神の寄って立つものは何か、よく分からなくなっている。そこらに、良寛さんに惹きつけられた理由があるような気がします。実際に私が良寛さんを本格的に勉強しだしたのは、中野先生の『清貧の思想』、これはエポック・メイキングな書ですから、この名著に触れたことが契機になりました。

近藤 では、その中野先生に是非同ってみたいことがいろいろあるのですが、先ほど、良寛さんに学ぶべき五点をお話してくださいました。確かにそうだなと思いながらも、果たして自分ができるのかどうか思っていたのですが、まず一点目の「物欲を捨てよ」。中野先生、やっぱり人より良い物が欲しいですね。

中野 うーん…それはね…若いうちはそうですね。だいたい50ぐらいまでそうだった。

近藤 私まだセーフです。(笑)

中野 それはね、結局、人間は20歳になったら社会に出るでしょう。物を持っていないでしょう。だから物を欲しいんです。何でも欲しい。生活にも下宿するにしても物が欲しい、欲しいから始まって、社会で暮らしていくにも背広が欲しい、何が欲しい、無いから物が一番なわけです。僕ぐらいの歳になるともうみんなあるんですよ。何もかもある。今、日本人は物を持ちすぎていると思う。戦後アメリカの生活が入ってきたときに僕はそれは良くないと思ったんですが、昔の日本人というのは二間か三間しか無くても朝になればふとんを畳んで押入れにしまってガラッと閉めて、食事のときはちゃぶ台を出して、食器を出して、食事が終われば全部片づけるんだから、何もない状態にあったわけです。ところが戦後、地方も都会も問わず、アメリカ化して寝室はベッドでしょう。だいたい僕はベッドなんてもんで寝る奴の気が知れないけど、(笑)それから、食堂はみんな、田舎も都会もみんなだいたい食卓で、イスでしょう。客間はソファがある。みんな詰まってるんですよ。詰まったら他に使い道はないんだから。そういう生活は昔の日本にはなかった。僕はこれは墮落だと思うね。もっと簡素な生活を送るべき…エコロジーな生活っていったって、今どこの家においても食器棚の中にはいっぱいあるでしょう。食器が。貴方の家なんかそうでしょう。クローゼットを見れば、着る物がいっぱいありますよ。それだけ普段こんなに必要かと思って調べれば、必要ない物なんですね。だからこれはいかに無駄に物を持ちすぎているか。物を持つより、捨てるということを今度は学ばなければならないですね。良寛は捨てることで対応する。全部捨てる。僕は今どんどんどん捨てていますが、なかなか捨てられないんだよね。それで、時々思い切って捨てるんだけど。

近藤 何が捨てられないんですか？

中野 本は捨てられないんです。なかなか。

それから…僕はベッドで寝ないんですよ。ベッドっていうのは良くない。畳の上に板を引いて、板の上で寝ているんだ。(笑)これはね、「西式健康法」って言って、板の方が良いっていう。一番良くないのは、柔らかいフワフワのベッドで、尻が落ちる、それが腰痛の元。だから、板の上で寝ていれば夜の間にきちんと収まる、だから腰が痛くなくなる。だから良寛のようにせんべい布団で板の上に寝てれば、身体には良いに決まっているんです。

近藤 で、その良寛さんの場合はそうするしかなかったんですが、中野先生の場合は敢え

てそれを…

中野 うん、それは良寛に学んだところもある。(笑) それからね、皆さんどんな枕を使っているか、僕は丸太棒を二つに切ったやつなんですけれども、これを首の下に置いている。これも非常にいい。そしたら先ほど二千年前のセネカの話をしましたけど、セネカっていうのは当時のローマで一番の金持ちって言われたくらいの人なんですけど、この人のベッドは板だった。それで、木の枕だった。僕は本当気に入ったね。(笑)

近藤 すいません、あの…ゼロの生活の訓練ですか。

中野 訓練になると思うね。安楽っていうものは求めだしたらきりが無い。それは決して身体にも心にも良くない。むしろ、板の上に寝る、木の枕というぐあいにしたほうが身体にいいと思う。それと同じように日ごろの食べ物も、肉だとかそういうものばかり食ってたらいいわけないんです。粗食が良いんだ。良寛はむしろ一生粗食だったでしょう。

それから…これもまたアメリカの悪口言うけど…北嶋さんに悪いんですけど、(笑) 戦後日本に入ってきたもので、アメリカから来たものはみんな良くない。(笑) それはね、スーパーとか、新潟にも大型店とかあるでしょう。あと…それからね…マクドナルド、(笑) こんなものなんかね、身体にいいわけないんだ。あんな悪い肉のかたまりみたいなもの食って、アメリカ人なんかあんな何百キログラムにも太っちゃって。アメリカでもマクドナルドは良くないって言う本が出てますから。マクドナルド。ファーストフード。コンビニエンス・ストア。もうどれ一つとして人間のためにいいわけがない。コンビニエンス・ストアついたら、僕はできたとき、こんなのすぐ無くなっちゃうだろうと思ったら、はやってるからね、やんなっちゃうね。(笑)

近藤 先生、私コンビニエンス・ストアは、夜中に雑貨を買いに行くのに…トイレット・ペーパーとか助かっているんですけど、それは用意しておけばいいだけの話ですか…。

中野 それは用意しておけばいいんだよ。(笑)

近藤 いいだけの話ですか (笑)。ですが、「ゼロに身を置く生活の訓練」ということで、食べ物話が出たところで、やっぱり「飽食」は人間をダメにする。

中野 飽食はダメだと思うね。これは岩波新書ですが、池田潔の『自由と規律—イギリスの学校生活』、これは英国へ留学した慶応の先生が書いた、英国のパブリック・スクールの生活の話。パブリック・スクールというのは、貴族とか、富裕な家の子弟ばかりが来る、全寮制の学校なんですね。ここは何をするかというと、おそろしく飯が不味いんだ。それでベッドは固い。そしてそのベッドは毛布一枚。風は吹きさらし。寮にいるあいだ六年間はそういうふうなひどい生活をさせるわけです。そして、授業は頭を使う授業じゃなくて、身体を動かすとか、そういうふうなことを訓練させる。で、腹が減るから不味くても食う。(笑) 良家の子弟は自分の家で贅沢なものばかり食っているから、始めは食え

ないんですね。ところがそれで慣れていくうちにだんだん身体を作っていくんですね。それが人間を作る、という考え。

近藤 今までちっともありがたくなかったものが、突然ありがたくなるという。

中野 それでね、経験させるわけ。それがゼロになる訓練なんだな。<sup>あ</sup>敢えてそういうことをやるわけ。

近藤 それは、学校だからやるんですか。それとも親が当然それを知っていて…

中野 親が知っているからやるんだね。

近藤 ライオンが仔を千尋の谷に落とすような。

中野 そうそう。それで僕はこの間セネカを読んでいたら、セネカも同じことを言っているんだ。息子には楽をさせてはいけないって言っている。子供は質素な生活から教えなければならぬ。今の日本人はね、子供を少し甘やかしすぎている。だから、子供に時々、セネカのすすめで、一週間なら一週間に限って、粗末な食事をさせ、粗末な寝床に寝かせ、粗末な衣服を着て、規則正しい生活をさせろというふうにセネカは言うんだ。定期的に。それがやっぱり、ゼロに身を置く訓練ですね。日本もそうしたらいいと思う。今の日本の子供は最初から周りに食い物があって、ゼロを知らない。だから、腹が減るっていうことを訓練させないと。

近藤 じゃあ子供を訓練させるということは、その親を訓練させなければダメですね。

中野 親も訓練させなくっちゃダメだ。

近藤 つまりその親を訓練させるということは、さらにその甘いおじいちゃん、おばあちゃんにも訓練させなくちゃいけないということですよ。(笑)

中野 それはね、戦後の長年の錯覚の一つですよ。つまり、与えることがいいことだというふうな考えが親にある。子供がのどが渴いたらすぐにジュースを買って与える。腹が減ったらすぐに買って食わせる。おもちゃも買ってと言われれば買ってやる。与えることがいい、というふうな考え方があるから、子供がダメになるんですね。

近藤 親もこの物欲を捨て、そして先ほど先生がおっしゃったように「自分が考えて生きる」、自分の価値観でものを考える。

中野 そう。子供の時から与えることが幸福にする<sup>すべ</sup>術だ、という考え方をあらためなくちゃならない。与えないことが幸福にする、ということもありうるんだから。我慢させる、

我慢を教える、ね。

近藤 最近ですと、持っていないといじめられるとかですね…今度は教育論に入っちゃうんで、また難しいフィールドになっちゃうんですけども。なんとかしなくちゃいけませんか、今の世の中。

中野 だって、今の学校は、小学校ひどいでしょう。じっと座っている子いないんだもの。僕は碁を打つから、今の子供たちに碁を打つことを教えたわけ。10分と座ってられない。10分すると立ってどこかへ行っちゃう。僕は叱りたいけど、叱ってもしょうがないから。やんなっちゃったから2、3回で止めちゃったんだけれども。今の子は本当我慢というのを知らない。親も悪いんだ、多分。

近藤 では、親の世代、そのさらに親の世代に、なんとかこの良寛さんの五つの教えを是非聞いてもらいたいと思うことが、日本のこれからの歴史をまた新たに作っていくんではないかと思うんですが。

中野 先ほど、北嶋さんが取り上げた「欲無ければ一切足り…」ね、あれと同じことをね、アンゲルス・シレジウスというドイツの17世紀の詩人がこういうふうに言っているんです。「足ることを知っている者はすべてを持っているのだ。欲深く多く求める者は、どんなに多くのものを得ても、まだまだ足りないと思うのである。」全く同じでしょ。それから、エピクロス、これは二千年前の哲学者、そのまま同じことを言っている。世界中の賢者がそういうことが大事だと言っている。足りることを知る。老子の中に「足るを知る者は、賢者…」とある。「足るを知る」ということが一番最初なんです。

近藤 「足るを知る」つまりは、自分の分<sup>ぶん</sup>をわきまえる…

中野 「分をわきまえる」んじゃないくてね、「分をわきまえる」というのは、封建時代に、身分の高低の差があった、それをわきまえてやってことです。「足るを知る」ということは、つまり、今お腹がすいたときに何かいただいた、それだけで十分満足する。ありがたいと思う。それから何度も言うけれど、自分の持っている物で十分だと考える。身分ということに関係がない。所有です。所有に対して。足るを知らなければいくらでも欲しがる。足るを知れば持っている物で十分だから。

近藤 それが一番今、私には足りないところで、明日デパートの広告が入ってきたら、また走るんじゃないかという。(笑) まずは「足るを知る」。

中野 「足るを知る」ということはね、物なぞは「今ある物で満足する」ということですね。ところが競争心というものが人間にあるから、隣の奴が良い物を持っていれば、もっと良い物を持ちたいという。そういう良い物を持っていれば、自分のほうが優越したいというのは、僕も必ずあるわけ。女性は特にあるな。(笑) ヴィトンを持ったってしょうが

ないんだよ。(笑) だって別に偉くなったわけじゃないんだから。(笑) 隣の人がヴィトンならば私も持たい、エルメスならエルメスを。その競争でしょ。同じなんだから。

近藤 それを捨てて、「今のために生きよ」。これは、今のために生きることが、時間の観念。

中野 時間の観念といいますけどね、もっと率直に言いますと、今日、今こういうふうにして皆さんがいて、我々がここにいるんですけど、これが「今ココニ」ですよ。これが人生の全部です。

近藤 お茶の世界で「一期一会<sup>いちごいちえ</sup>」というのをよく言われますが。

中野 それはね、結局、今日こういうところでも音を録音するとか、画像を撮るとかするでしょう。それで、後で聞けばいいからって、今一生懸命聞いたり、話したりしない。「リピート」という考えがはやっているんですね、ビデオとか何とか。ところが人生にリピートってないんだ。だから、「無い」と考えるのが一期一会なんですよ。それに徹底する。今を徹底して生きる。

近藤 例えば良寛さんの詩の中にも、時間の観念だとか、それから今自分がここにいるというような詩もたくさんあるでしょう？

中野 ちょっとそこの辺、北嶋さんに話していただいて…

北嶋 先ほどからの話を振り返ってみるんですけど、今の子供たちはゼロを知らない子供たちである。飽食の時代ですから、「空腹こそ一番の料理人である」ということは全く知らない子供たちで、ゼロに身を置く訓練<sup>きねん</sup>というのは非常に大切である、ということですね。中野先生がさっきおっしゃったように、<sup>きねん</sup>杵を二つに割ったような枕とか、木製のベッドとかね。テレビも見ないで早く寝て、早く起きて。そして犬の散歩をする時に太陽が登ると足を止め、<sup>かしわで</sup>柏手を打つ。そういう先生の生活自体が、「今良寛さん」みたいな生活だなあという気がします。家の中でも先生はスリッパじゃなくて、草履がお好きだというようなことをおっしゃってますね。とにかく、なんでもないごく当たり前のことを、ありがたいというふうに感ずるためには、身をゼロの地点に置くという必要がある。ゼロという欠乏の中にあって初めて、ひとかけらの食べ物、そういうものが大変ありがたく思うし、感謝すると思います。ですから「身をゼロに置く訓練」というのが中野先生の「五つの提言」の中でも私は一番大切なことかなと考えます。

良寛さんの時間に触れた漢詩は、哲学に関するもので難しいですが、時間観がはっきり示されている、「過去已過去 未来尚未来」(過去<sup>すて</sup>已に過去 未来<sup>なお</sup>尚未来)で始まる詩などがあります。具体的なものとしては、「夜雨<sup>やう</sup>」と題した詩に、「一夢中<sup>いちむうちゅう</sup>」(一夢の中)という表現があります。また、別の詩に「一回首<sup>いちくわう</sup>」(ひとたび回首すれば)とも言っていますから、昔を振り返ると、思い出が今ここに、たちどころに湧いてくるのでしょうか。中野先



生のご著書『風の良寛』の「天真に任す」の章に、良寛の生涯全体に対する哲学的な思索への問いかけがみごとに描写されています。それで、近藤さんの問いにつながりますかね？

近藤 先ほどの五つの話ですと、二つ目の「今のために生きる」。つまりは、今の時を大切にするという。

中野 「時を大切にする」というのとはちょっと違うんだけどね、「今ここにしか生きる時間はない」ということ。人生にリピートは無いってということと同じです。だから昔の言葉にあったけどね、「私が貴方を見、貴方が私を見、こういうふうに会ってるときが、この中が一つの会うということだ」という言葉がありますけど、本当にそうなんです。リピートはダメなんだよ。だから、僕はテレビっていうのは一切見ないことにしている。

近藤 それは何かきっかけがあって？

中野 あんまりくだらないからさ。(笑) テレビっていうのは本当にくだらないでしょうが。今の日本のテレビっていうのは下劣<sup>さくわ</sup>の極みだね。見れば食べ物の番組ばかりで。

近藤 かつてテレビ局に身を置いた私としては、何とも答えられないですが。(笑)

中野 初めの頃のテレビはね、新しい未知の世界を紹介するということでは非常に有益だった、今のはお笑い番組であれ、なんであれ非常に下等になるばかりでしょう。とくにNHKっていうのも墮落して、時代小説、時代ドラマなんていうのも初めは、20年くらい前は見てた。つい4、5年前かな、僕は藤沢周平っていう小説家が好きで、藤沢周平の小説をテレビ化するというので、いつも7時に寝るのを8時まで起きて見たんだけど、そしたらね、実にくだらないんだな、これが。昔の事を全然間違ってる。で、嫌になっちゃった。そしたら今ますますひどくなっている。今年の「武蔵」なんていうのは、最低だね。(笑) あれは現代劇の、しかもどんちゃん騒ぎで、武蔵じゃないんだな。NHKだからそういうことってわけじゃないんだよ。今一番墮落しているのはNHKだね。

近藤 それはつまり、先ほどおっしゃってた、「自分の判断」…

中野 それが無くなってきているわけ。テレビの視聴率なんていうものあるでしょう。あれがテレビの墮落した元凶だね。

近藤 やはり右ならえで、人が見ているものを見なくちゃという。

中野 そういことですね。

近藤 中野先生はテレビをご覧にならず、夜は早くお休みになって。

中野 携帯を持たず。電話に出ず。(笑) テレビを見ず。パソコンを持たず。何もないんだよ、そういうものが。

近藤 必要ないんですね。

中野 必要ない。それから、家にはクーラーもないしね。で、何してるかというのと、夜7時に寝ちゃうんだから。なにしろ。(笑) で、朝は4時か5時に起きるからね。テレビに付き合ってもらえない。僕の友達に貴方は何時に寝るんだ、なんて聞くと11時半くらいに寝ているという。それまで何しているかと聞くと、たいていテレビを見ているからね。(笑)

近藤 同じ時間を使うのであれば、もっといろいろなことができるという。

中野 つまりね、「何もしない」ということは上等な状態である、ということを学ぶのは大変なんだ。

近藤 「身を『閑<sup>かん</sup>』に置け」ってということですね。

中野 「身を『閑』に置け」ってということだね。何もしない状態は、みんな退屈と思うんだね。それが退屈なうちはダメなんだ。

近藤 え、でも退屈ですよ。

中野 それはね、修行というのはそこなんだな。やっぱり人間はね、幸福になるためには修行しなくちゃならない。心の訓練をしなくちゃならない。それは、静かに身を置いて、鳥の声や風の音を聞く、自然と自分が一緒になってれば退屈するどころではない。命というもののありがたさが分かる。それはね、自分がもうすぐ消えていくものであるというように、死んでいくものであるというような自覚を常に持っていれば、今生きているということが非常にありがたく感じる。いつまでも生きられると思うから退屈に感じるんだな。

近藤 でも私は先生よりまだちょっと若いんで、そんなに目の前に、「人間はいずれい逝くんだよ」と言われてもまだまだ先のような。…準備はしとかなくちゃいけないんですか。

中野 そうですよ。(笑)

北嶋 先生の「今ココニ」っていう概念は、例えば良寛であれ、道元であれ、老子であれ、シレジウスやセネカであれ、そういう人々を「永遠とつながる今」(eternal now)に持ってこられる、つまり過去に生きた賢者たちを先生が「今ココニ」持ってくるためには、どのような修行や心の訓練をすればよろしいでしょうか？ 結局、「今を生きる」(カルペ・ディエム)とは、「汝、時をむだにすることなかれ」ということでしょうか？

中野 結局…「貴方はいつまでも生きられるつもりですか？」とセネカも言っているんだよね。僕は死は近くにあるという思いを常に持ってますから。朝起きた時に、僕は「汝今日一日を喜んで生きるや」というふうに自分に問いかけるんです。そして喜んで生きる、とだいたい答える。あんまり喜んで生きたくない日もあるけど。(笑)それは。だけど、そういうふうに一日しかない、と思う訓練をしています。

近藤 例えばじゃあ、私も今日中野先生にお会いして、遅くはないと思うので、訓練したいと思うときには、どんなふうにしたら。

中野 自分は明日の朝生きていないかもしれない、死ぬかもしれない、と思うことです。事実、貴方の周りだって死んじゃった人がたくさんいるでしょう。実際そうなんだな。みんなね、いつまでも生きられるような思いをしているから良くない。死は近くにある、という思いを常に持って。

北嶋 上田<sup>みよじ</sup>三四二さんという作家が書いてますが、「今ここに我あり」と言ってますね。医者でもある彼は、大きな病気の後、いつまたやられるかもしれない、という不安を抱いて生きていました。何とかして死の恐怖から逃れたい、ということがあったのですね。死後の世界を信ずる、ということは、例えば天国とか極楽浄土とかへ、自分の個性が保たれたまま移って行くんだ、と考えれば楽なんだけれども、実際はなんとなく信じられない。それで、彼は「時間は循環する」という解決法を見つけます。

つきて見よ ひふみよいむなや ここのとを とをと納めて またはじまるを

という良寛歌を取り上げてみます。一から十までぼーんと空中に列をなして、棒のように投げ出されるんじゃなくて、それがいつの間にか曲がってきて環になっている。例えてみれば、真珠の首飾りみたいな。真珠は十個あるんですね、どこかに結び目があって環をなしているんだというようなことを言ってます。また、時の川は、信濃川みたいな大河のイメージじゃダメでしょうけれども、時の川はどこを切っても切ったところで環<sup>つな</sup>をなしている。その川の流れは永劫<sup>えいごう</sup>に続くでしょうが、川の初めと終わりがどこかで繋がっている。時間は恐ろしい環の重なりとなって、繋がって流れていく。このような考え方をして生きれば、20歳で死んでも、80歳まで長生きしても全部そこで納まっている。つまり、十と数えて納まっているのです。「時間の本質というのは、回帰性、元へ帰る、環をなす」と彼は言っていますが、時間は循環してほしいと願っているのです。

中野 それね、僕、東洋の考え方だと思うんですね。十二支というのがあって、60歳で還暦になる。東洋の考え方というのは循環する。これは西洋から来た「2003年」という考え方よりずっと上等だと思います。東洋人というのはいつもこういうふう考えて、完結している。

上田三四二っていう人は、自分は直腸ガンになって、医者なもんだから、もう自分の命

は近いうちに果てるということを意識して、それで良寛に入っていくんだね。そして良寛の「優游<sup>ゆうゆう</sup>」という生き方に救われた。僕は上田三四二という人と親しくしてて、上田三四二の良寛観からずいぶん良寛を学んだ。彼は自分はすぐ死ぬもんだと思って良寛に近づいた。そうすると良寛の優游とした生き方が実にいいという。

近藤 その「優游」という言葉なんです、どういうふうに捉えればいいんですか？

中野 これがもう言えたら良寛が全部言えます。(笑) 良寛の心を表しているんだけど、ちょっと一言では言えないですよ。良寛は実にそれを詩にも表していますしね。その優游という心はね、この歌に出てくるんですね。

むらぎもの 心楽しも 春の日に 鳥のむらがり 遊ぶを見れば

これは実に単純な歌ですよ。 「むらぎもの」というのは「こころ」にかかる枕言葉で意味がないわけですが、それは音として「むらぎもの」、とても感じの良い言葉ですね。心が楽しい。春の日に鳥のむらがり遊ぶを見れば。単純な歌で、しかもなんとなく読んですぐに分かるうえに、全体が非常に力強いリズムを持っているでしょう。それが良寛の歌の特徴ですが、これは良寛の歌の中でも特に良いと思う。そして、なぜこんなことが心楽しくなるかという、良寛は長い間五合庵で寒い冬をこらえた。その寒さというのは我々の想像を絶するくらいなんですね。例えば、板の間にむしろを引いたくらいで、壁もなくて風は入ってくる。そして夜、囲炉裏<sup>いろり</sup>を炬燵<sup>こたつ</sup>みたいにして足をさしくべて、

埋<sup>うず</sup>み火に 足さしくべて 臥<sup>ふ</sup>せれども 今度の寒さ 腹に通りぬ

って歌があるでしょう。今晚の寒さっていうのは腹にまで突き刺さって入ってくるという。これはもうガチガチに体が冷えている。この「腹に通りぬ」っていう表現がね、歌人上田三四二もそうだけど、歌人が高い評価を与えていますね。感激しているから。こういうふうな寒さを体験してきて、そしてその上に春が来るんで、春の喜びがここに出てくるんですね。

むらぎもの 心楽しも 春の日に 鳥のむらがり 遊ぶを見れば

鳥と自分が一体になって、そして春を迎える。春っていうのは宇宙です。その中で鳥と通じて一緒に心楽しむ。鳥が歌っているのは自分が歌っているってことです。

近藤 良寛さんは自然を題材にして、自分が、その中に。

中野 その中というよりは、「自然とともに」ですね。

近藤 「ともに」ですね。一体となって。

中野 だから、例えばこういう歌があるでしょう。

草の庵に 足さしのべて 小山田の 山田のかはづ 聞くがたのしさ

これも実におおらかな歌で、実にいい歌ですが、草庵の中で、「足さしのべて 小山田の 山田の…」って続けるところがこの歌のミソですね。「小山田の 山田のかはづ 聞くがたのしさ」。外で蛙が鳴いている。春が来て、温かくて、ああ良い天気だというんですね。「足さしのべて」というのは、健康法らしいんですね。足を真っ直ぐ伸ばして寝る。そして臍下丹田せいかたんでんに息をためて、腹をふくらませるんですね。僕も自分でやりますけれども、こういうふうによって止めとく。慣れるとだんだん腹がふくらんでくる。それから息をすーっと出す。そして臍下丹田からさらに足の先まで気をみなぎらせる。足の先から気を出す。それで寝て、深呼吸して、腹の下に息をためるわけ。本当に体がよくなるからね。

北嶋 おなかの丹田という部位に力を集中する。特に講演やスピーチが長いときにはそのようにしろ、と言われてますね。(笑) 中野先生は『良寛心のうた』の中で良寛の詩は思想詩であると書かれていますね。

中野 良寛の生涯の中でも代表的な詩ですが、ちょっと長いですが読みます。

生涯 懶立身	生涯 身を立つるに懶く <small>ものう</small>
騰々任天真	騰々 <small>とうとう</small> 天真にまか任す
囊中三升米	囊中 <small>のうちゅう</small> 三升の米
爐邊一束薪	爐邊 <small>ろへん</small> 一束の薪 <small>しん</small>
誰問迷悟跡	誰か問わん 迷悟の跡 <small>めいご</small>
何知名利塵	何ぞ知らん 名利の塵 <small>みょうり</small>
夜雨草庵裡	夜雨 <small>やう</small> 草庵の裡 <small>うち</small>
雙脚等間伸	雙脚 <small>そうきゃく</small> 等間 <small>とうかん</small> に伸ばす

自分は生涯、人と争って先に出ようというようなことは全然しなかった。「身を立つるに懶く」というのは、つまり出世しようとか、人と競争をして勝とうとか、そういうような気持ちは全然無かった。「騰々 天真に任す」。「騰々」というのはそういう勢いですけど、全て「天真に任す」、天が自分に与えたもの、運命がもたらすものに任せてしまう。何が起きててもそれを受け取る。そしてそれに対して文句を言わない。「囊中 三升の米」、頭陀袋ずだの中には今日いただいてきた三升の米がある。「爐邊 一束の薪」、炉端には一束の薪がある。これでもう十分じゃないか。これ以上何が要るんだ。これが「足るを知る」ですよ。さっきのね。「誰か問わん 迷悟の跡」、迷ったとか、悟ったというような、そういうことは自分はもうどうでもいい。「名利の塵」、有名になるとか、利益を得るとか、そういうようなことも自分には何も関係ない。ただ自分を「夜雨 草庵の裡」、しとしとと夜雨が降っている草庵の中に居て、「雙脚」、二本の足を長々と「等間に伸ばす」。これが自分の幸福だとい

うんですよ。だから、物は三升の米があれば十分。薪はこれだけあれば十分。それから、ただ、こういうふうにして、この時を生きている。雨の音を聞き、そしてその中で昼間の托鉢で疲れた体を長々と伸ばして。これが自分の幸福だと。

近藤 ただそういう良寛さんを、周りは放っておかなかった。

中野 これはね…僕はね、良寛っていうのはね…初め越後に帰ってきて、その当初はね、さっきの郷本の話みたいに乞食坊主、悪いことをしている奴というふうにな、だから托鉢に行っても大変だった。ところが良寛という人の人柄が、だんだん分かってきた。そうすると、まず最初に子供が認める。それから他の人が認める。だんだん地元の知識人であるとか、地主が認める。そうすると良寛の人柄が誰でも知られるようになる。良寛という人は世の中のためになることを何もしてないけど、良寛という存在によって、人を救う。気持ちの面で。

もう一つ、「捨てる」ということと言えばですね、良寛というのは非常な学者だった。『万葉集』ね、あの当時万葉仮名の難しいのを独力で読んだでしょう。それから書は懷素の『千字文』、僕もやりましたが、僕が書くとき一週間くらいかかる。ところが良寛は毎日朝、空に向かって『千字文』を書いていた。そんな練習をしていた。当時の大知識人ですよ。ところがそれを全部捨てるんだな。知識も。

近藤 そこで、例えば長岡藩からお寺の住職にどうだ、なんてお話しが来たんですね。

中野 そんなの考えないわけですよ。そんなのは一切嫌だと。これがいいと。三升の米があればいい。そこが良寛のすごいところですよ。良寛は非常に芯が強いですね。

北嶋 長岡藩主の牧野忠精が良寛さんを訪ね、「長岡の町に来てほしい」と申し入れたのに対して、「焚くほどは風がもて来る落ち葉かな」という俳句を渡したのは、良寛さんの気骨を示すものとして有名なエピソードですね。

うず 埋み火に 足さしくべて 臥せれども 今度の寒さ 腹に通りぬ

先ほども引用された歌ですが、「炬燵の火に足を焼べる」というのは、すごい言葉ですよ。ここで、先生に質問したいと思っていることがあります。良寛の諸国行脚時代という若い頃に帰ってしましますが、四国土佐の庵で近藤万丈という人に会ったという話がありますね。万丈は高知の近くで激しい雨に降られ、近くの庵に駆け込みます。その庵には面やせたひとりの僧がいました。彼は何も言わない、黙っている。口を利こうともせず、座禅する様子もない。ひょっとしたら狂人ではないか、と万丈は思う。しかし、無愛想であっても、親切な応待で、麦の粉を湯で溶いてくれたりする。二晩泊めてもらうわけですよ。良寛とおぼしき僧の机辺には、木造仏があり、『莊子』が二冊置いてあった。そして、万丈が白扇を取り出して揮毫を求めると、僧はすぐ筆を執り、絵を画き賛を入れてくれた。その賛の末尾に「かくいふ者は誰ぞ、越州の産了寛書す」と書いてあったという。

私はそこには唐版の『莊子』があり、良寛の漢詩がはさんであつたことに注目したいのです。莊子とか、あるいは老子とか、「老莊思想」が良寛の思想の中にふんだんに取り込まれていると言えましょうか？

中野 老子、莊子はね、良寛の中に非常に早く入っているんだよね。それは結局、老子も莊子も自然の中に身を任せて「無為」、何もなさずに同化するというのを最高だと言ったんですね。それはこういうことなんですよ。「そこで、肉体のためにあくせくすることを止めたいと思うなら、世間を捨てればいい。捨てるのが第一である。世間を捨てれば面倒な煩いもなくなり、煩いがなくなれば、心身も平靜で穏やかになり、平靜であれば、この広い世界とともに新たに生まれ変わる。」世間を捨てると自分の心が平靜になり、世界と、というのは宇宙ですね。宇宙と一つになる。それを莊子が言っているが、それは良寛そのものですね。

それで良寛という人はね、何もしない人で、まるで愚なんじゃないかと。ところが愚か者であるはずの良寛が、解良栄重の家に二晩泊 matteredら、こういうふうなことだった。これもまた読みますけどね。  
「師、余ガ家ニ信宿日ヲ重ヌ。上下自ラ和睦シ、和氣家ニ充チ、歸去ルト云ドモ、数日ノ内、人自ラ和ス。」

良寛が泊まっていると何もしなくても、上の者、年寄りも下の者も自然に仲良くして、和氣あいあいとして、そして良寛が帰ってもその気持ちは数日のうち家の中にある。  
「師ト語ルコト一夕スレバ、胸襟清キコトヲ覺ユ。」

良寛と話しかける一晩でも胸の中が清らかになる。  
「優游トシテ名状スベキコトナシ」ということですね。良寛の存在というものが人を救うんだね。

近藤 そういう人になりたいと、皆さん思われると思うんですが、じゃあ果たして、といったときにさっきの五つの提言が出てくるんですね。

中野 あれがね、僕は良寛の五つの教えだと思う。これはね、さっき北嶋さんが言ったけれども、21世紀はね、心の時代にならなくちゃダメだと思うんですよ。地球が減びるんじゃないやっいけないんだから。今まで20世紀はどこ国も車を作って競争する、テレビを作って競争して、競争競争の時代だったが、もう資源に限りがある、地球環境にも限りがある、それからマーケットが一杯、だからこれ以上経済成長というのは世界的にありえないんだな。だからあとは譲り合って生きるしかない。競争原理じゃなくて、譲り合う。それから、物を持つんじゃないで、心に生きる。そういう世紀に21世紀はなくなっちゃいけないし、なるだろう、ならざるを得ないと、僕は思う。

近藤 競争よりも、「共存」ということですね。良寛さんの教えというのが、私たちの世代で終わっちゃいけないんですね。

中野 僕はそう思いますね。

近藤 そのあたり、若い方々を教えておられる北嶋先生は。

北嶋 そうですね、質問があったら受けたいと思いますけれども、良寛の<sup>おし</sup>訓えはやはり連綿と受け継いでいく必要があるんですね。有名な哲学者、A.N.ホワイトヘッドの『教育の目的』(The Aims of Education by Alfred N.Whitehead)という本に、「教育の知的成長の諸段階とは、ロマンス (Romance) — 精密化 (Precision) — 普遍化 (Generalization) への誘いである」と書いてあります。そのロマンスにしても、精密化にしても、普遍化にしても、そのいずれの契機、段階も良寛は全部持っているわけですね。ロマンスというのは、例えば、良寛の「逸話」や「長歌・反歌」ですね、あるいは『良寛禅師奇話』ですね、そういうのを持ってくるができるでしょうし、次に精密化ということになれば、良寛の人生哲学や生涯を述べる「漢詩」の類型と思想に明らかでありましょう。普遍化というと、おそらく「法華賛」が最高ではないでしょうか。

それから「辞世の歌」ですね、

形見とて 何残すらむ 春は花 夏ほととぎす 秋は紅葉<sup>もみぢ</sup>ば

これは良寛の人生哲学の結語であると考えていいと思います。自然界の全体を形見とする思想。これはまさに、エコロジカルな哲学ですね。後世への最大の遺産の一つとして、良寛の思想というものが必ず入ってくる。そういう目線でもって若い人たちに教えることが教育の崇高な任務の一つではないか、と私は考えています。

近藤 郷土が残したというよりは、日本が生んだ良寛さんをこれからの世代に是非残していきたいですね。

中野 良寛はね、だんだんこういうふうになんかに知られて、良寛ファンが増えてきたということは、これはね、大変なことだと思う。明治の初め頃は、良寛というのはほとんど知られない存在だったわけでしょう。それがとくにここ20年くらいの間に急速に良寛信者が増えてきた。これは日本にとって大変大きなこと。これは全然違う価値観を受け入れるということだから。今まで無いようなことですよね。しかも良寛は語らないんですね。詩を読み、歌を読む。僕は詩を読み、歌を読んで良寛のことが好きになったわけですけどね。良寛自身は何一つ言っていない。こうしなさいなんてことは。ただ自分でやりたいことをやっているだけ。それがさっきも言ったように、良寛という存在が人を救う。大変なことですよ。

近藤 とりあえずの時間では本当に良寛さんを語り尽くせないということなんですけど、それでも中野先生、北嶋先生の「良寛談話」の一端を皆様にお聞きいただけたのではないかと思います。さて、そろそろ質問コーナーに移らせていただきたいと思います。先ほど、休憩時間にお書きいただいた質問もあるんですが、是非、この場でお手をお挙げになり、何かご質問があれば。良寛さんに限ったことではありません。なかなか普段お会いするこ



とのない中野先生の本を読んでこういうことが、ということがあればどうぞお手をお挙げください。

(挙手者なし)

いらっしやいませんか。新潟の方っていうのは本当に恥ずかしがり屋で自分じやなかなか手を挙げないんですが、こんなに質問が来ております。

では早速、新潟市の方です。

「良寛さんは現代人にとって対極にある人と言われましたが、良寛さんの生きた時代の人にとっても、やはり対極にあった人ではないですか？」

中野 僕はそれは変わらないと思いますね。例えば、さっき子供と遊ぶということを行いましたけれども、当時は今よりも、大人が子供と遊ぶなんてとんでもない話ですよ。それを良寛は平気でやった。自分の自由に生きてるわけですよ。その評価は何一つ関わりがない。そういうふうにあらゆる点でもって当時の人と反対。人間というのはみんなどこかに所属しているでしょう。庄屋であったり、農民であったり、商人であったりと、何かであって、何者かであるわけですよ。漢詩人であったり、歌人であったりね。ところが良寛は何者でもないんですよ。僧侶かという僧侶でない。それから、どこにも所属してない。それから、歌は歌っているけど歌人でない、詩を作っても詩人じゃない。何者でもない、っていうところがすごいところですよ。

近藤 私たちは、少なくとも私は、小さい頃から「働かざる者食うべからず」と言われて育ったのですが…

中野 それはね、良寛は一生、人のお世話になって生きるということを感じつづけたわけですね。そのための引け目も抱き続けた。良寛はその代わり何したかっていうと、心の世界に生きるっていうことを実現した。そして常に、自分自身であるっていうことを実現した。江戸時代を通じて、良寛ぐらい自分自身だけ、人間だけで生きたという人はいないと思う。それは滅多にいない。つまり、何者でもないっていうことは、人間だけであるということ。現代でも難しいのはこれですね。何者でもない、どこにも所属しない。たいてい世の中でやっている人は名刺を作る。そこのところに肩書きがつく。自分自身だけであるっていうのは難しい。どこかの誰かだからね。ところがそれを一切やらない。

その上に良寛は、自分はどこから来てどこに去っていくかということを詩にうたっていますが、こういうふうな詩を作った人は初めてです。形而上で、自分の生はどこから来てどこに去っていくかというようなことを考えた人は。

それからもう一つは、今、世間の人というのは将来のために働いているでしょう。何年後かに楽な生活、豊かな生活をしようと思って、今を犠牲にして、将来のために生きている。とくに戦後日本は…またアメリカの悪口になるけど。ローンだとか、キャッシュ・カードだとか、あんなものがアメリカから入ってきた。あれはちっとも良くない。ローンなんていうのはね、収入がどんどん増えていくという時代を前提として将来に借金をして、先取りするわけ。あんなのは最初から借金じゃないかと思っていたけど、景気が悪くなって、ローンのために苦しんでいる人がたくさん出てきたでしょ。これはしょうがないんだ

な。ローンなんていうのは借金なんだから。カードで買うなんていうのもこれもダメなんだな。将来のために生きるってことをしてたんじゃ人間はダメなんですよ。良寛は今日のために生きる、と言った。良寛は明日の生活のために今日を良くしよう、もっとお布施を貰っておこうなんて馬鹿なことは考えなかった。

近藤 やはり私が小さい頃に、今でもそうですが、将来のことを考えて今を生活しなさいと言われたような気もするんですが。それとは全く反対ですよ。

中野 「自分を作る」ということは、将来のためでもありますよね。ですが、将来豊かな生活をするために、今を犠牲にして生きるなんてことは、全然逆なんだな。

近藤 計算高く生きてはいけない、ということですか。

中野 計算高くというよりもね、なんていうのかな…つまり、今を大事に生きなさい。今を。将来は無いんだから。たいていの人は未来のために今を犠牲にして、せかせかと働いて結局早く死んじゃっている。(笑) ローンなんていうのは本当にバカバカしい話。将来のために今を犠牲にして、先取りして。昔の日本人はちゃんと貯金をして、カネができてから家を立てるってことでやったんだけど今は逆ですね。

近藤 同じような質問で、男性31歳の方ですが、「現代人と正反対の生き方をしていたと言われる良寛ですが、良寛が生きていた当時、周囲の人は「良寛的生き方」をどのように捉えていたのでしょうか。また、当時においても異質な生き方であったのであれば、周囲の人々との摩擦やコンフリクト（conflict [争い]）みたいなものはなかったのでしょうか。そのような摩擦はどのように解決させていたのでしょうか？」

中野 それはね、摩擦はあったんですね。良寛が越後に来て知られていないときは本当にひどい目にあった。生き埋めにされそうになったとか、そういうようなこともしょっちゅうあった。子供らに石を投げつけられるとか。そういうふうなこともあった。だけど、だんだん認められるようになった。そうやって日常社会に受け入れられるんだけど、それでもなおかつ、良寛を認めない人はたくさんいた。例えば、子供と一緒に毬をついて遊んでいると、どうしてお前はそんなことをしてるんだっていう人がいたっていう。これはね、そういう目はたくさんあったと思うね。それはね、働いている農民にすればね、いつもあそこで坊主が毬をついて遊んでいる、けしからんっていう目は必ずあった。それに対して良寛は一切答えない。頭を垂れて答えず。抵抗しない。周りの抵抗、白い目はあった。それに対して良寛は一切答えない。

近藤 良寛さんが変わらなくても、周りの人たちが変わっていったんじゃないですか。

中野 良寛の生き方によって、周りの人が少しずつ変わっていくわけです。まず最初に子供が変わる。それから、当時の解良家のような地主層ですね、その人たちが良寛を本当に

理解した。その人たちが変わったわけ。これも大変なことですよ。良寛という存在があるということによって気持ちが清らかになる。清らかにするのは物じゃない。良寛がいることによって心が清らかになるという、その不思議、良寛の力です。人間の力です。何の役にも立たないけれど人間の力というものはすごい。役に立つ、そういうものとは全然違う次元に生きている。それが良寛なんです。

近藤 さて、次の質問ですが、新潟市にお住まいの男性70歳。

「今の社会で不足しているのは隣の人を思いやる心だと存じます。独り暮らしのとき、どのようにして友人を作ればよいのか、良寛の教えなどがあれば是非教えてください。」

良寛さんってお友達がいたんですか？

中野 非常に仲のいい友達がたくさんいたようです。地主層の人でね。しょっちゅう酒を携えて遊びに来たり、一緒に歌を歌ったりする。そういう友達がいた。

老年になったら、なおさらのこと思いやりというのかな、許すというのかな、<sup>とが</sup>咎めないという心が必要だと思う。それが良寛から学ぶべきことだと思う。自分自身は<sup>けいかく</sup>圭角の強い人間でできないですからね。自分自身はできないから、なおさらやろうという気がしてま

近藤 いい人は寛容の人って言われますもんね。

中野 そこが難しいんだね。

近藤 中野先生をもってしても、まだ良寛さんになるのは難しい。

中野 全然できないですよ。僕は全然違う。ただ、いくらかでもできることをしようと思って、例えば、あいさつするという。女房と二人きりで暮らしているから、ぞんざいになりがちなので、朝は必ずおはようって言うことにしているし、犬にもおはようって言うし。(笑) 今日を始めるっていうことです。夜はお休みと。そういう単純なことが日常生活に必要なんだね。

近藤 思えば良寛さんは、月に向かっても「こんばんは」って言っていた気がしますもんね。

北嶋 <sup>いたわ</sup> 労りあうしなやかな心を持つということですね。透徹した眼力をもった、<sup>みょうえしようにん</sup>明恵上人なんかは、<sup>ぶっしょう</sup>仏性は人間のみとは限らない、何にでも仏性がある、動物にもあるといって、牛とか馬にもおじぎをして歩いたというのがありますが、中野先生の犬にもおはよう、お休みっていうのは初めて聞きましたね。(笑) 隣人、家族やペットに対して、そういうしなやかな心を持つというのは、やはりとても大切じゃないかと思うんですね。

近藤 さあ、それでは次の質問です。新潟市内の男性57歳です。

「ユダヤ教、キリスト教の世界など、例えばクムラン教団、アッシジの聖フランチェスコの思想、ピューリタニズムなどを感じるんですが、良寛がこれらの思想に直接触れたとは考えにくいと思います。とすると、何が良寛さんをしてこの宗教的な天才ともいえる思想に至らしめた、とお考えでしょうか？」

中野 僕はね、アッシジのフランチェスコと良寛とはずいぶんよく似ていると思いますよ。生きた世界は全然違うけど。アッシジのフランチェスコも、持たず、所有せずということ徹底してやった。持たない者は神に近しいということで、実際に神とか仏とかというものを信じて、そしてその神性、仏性というものが自分の中にもあると信ずれば、持たないの一番神に近くなるというのは、賢者はそうみんな考えている。アッシジのフランチェスコだけじゃなくて、良寛だけじゃなくて、セネカもシレジウスもみんな持たざるが神、仏に近づくと。道元もこう言っています。「持たないのは仏に近い。」それは持たないって言うことによって、心が心だけになって、神に近づいていく、ということですね。エックハルトという人が言っていますが、「自分が一切を捨てる。物欲を捨てる。神を欲しいと思う心さえも捨てる。全て捨てて心が空になれば、そこに自ずから神が入って来ている。」その考え方はね、道元にもあるし、良寛にもある。みんな同じですよ。空にすればそこに神が入ってくる、というふうに。しょっちゅうこうやったらもうかるだろうとか、あいつ憎らしいだとか、そんなことばかり考えては神は入ってこない。

知識さえも持つなということはね、法然上人もそうなんです。法然上人という人は、建仁寺であらゆる学問において当代随一の学者だった人です。そして京都の坊さんたちと討論をして負けたことがない大知識人だった。ところが、法然上人がそれを全部捨てる。「念仏を信ぜん人は、たとひ一代の御のりをよくよく学すとも、一文<sup>もん</sup>不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のともがらにおなじくして、智者のふるまいをせずして、ただ一向に念仏すべし。」〔(注)法然『一枚起請文』〕これは貴い言葉だと思いますね。うーんと知識があって、それを全部捨てちゃうんですよ、「一文不知」の不知というんですね。それはね、良寛ですよ。良寛は万葉仮名や漢詩など非常に学問のある人だったけど全部捨ててしまふ。それを「一文不知の愚鈍の身になして」。だから、詩にもありますけども、托鉢に行くと、そこらへんの農民が「良寛さんちょっと寄っていかないか」って、どぶろくを出して、一緒に飲む。農民と同じ視線で話せる、という。当時の農民はおそらく字なんて読めない、文盲<sup>もんもう</sup>の人が多いでしょうから、それと同じレベルで話すことができ、親しむことができた。これが大変なことだと思う。

近藤 それは良寛さんが自分から捨てた、そういうことではないんですけれども。

中野 今でもね、知識をたくさん持っているっていうんで、ひけらかす人がいますけれども、そういうんじゃないかって一切捨てるんだな。そしてそれはどうでもいい。それは同時に、余計な情報は要らないということですよ。

近藤 それは十分あった後に捨てたから。

中野 今ね、コンピューターを使えば、猛烈に早くいろいろな知識が得られるけど、あんな情報要るのかと。要らない情報がほとんど。僕は新聞しか読みませんが、新聞だって要らないくらいなんだからね。世の中のことを知るのに必要な情報ってそんなにたくさんあるわけじゃない。

近藤 情報って不思議なもので、いっぱい集めれば集めるほど、まだ集められるという、まだ集めなきゃという不安感が募ります。

北嶋 先ほどのアッシジの聖フランチェスコの質問の追加として、ひと言<sup>こと</sup>コメントをいたしますと、まず聖フランチェスコと良寛を比較考察した著書も出ております。〔(注) 石上・イアゴルニツァー・美智子著『良寛と聖フランチェスコ』〕それから、もしかして良寛さんは、「聖書」に触れたかもしれない、という人もいます。しかしそれはなかったかもしれません。でも、良寛の「地震の歌」と、例えば聖書の「コヘレトの言葉」の三章に、「すべての事には季節があり、すべてのわざには時がある。生まるるに時があり、死ぬるに時がある」という一節がありますけども、見事に呼応しているような文章があるんですね。まさしく良寛にとって、「地震に会うに時があり、死ぬるに時がある」でありました。そうすると、たとえ良寛が「聖書」を読んだことがなくても、思想的に繋がっているところがある、というふうに考えていいのではないかと思います。

中野 あれはね、手紙にあるんだけど、すごいことが書いてある。三条で大地震があつて千六百人が死んだときに、知り合いのところに出向いた、その時に「災難に逢<sup>あう</sup>時節には災難に逢<sup>そうろう</sup>がよく候。死ぬ時節には死ぬがよく候。是はこれ災難をのがるる妙法にて候」って書いてある。これは本当すごいと思うね。例えば神戸大地震があつたときに僕が神戸にいる人に「災難に逢<sup>あう</sup>時節には災難に逢<sup>そうろう</sup>がよく候」なんて言ったら怒られちゃいますよ。(笑)すごい言葉ですよ。つまり運命をもたらすものに抵抗してもしようがない。それは受け入れてしまう。自分の自由になるものを分かって、自分の心を働かせる。自分の自由になるものとならないものをきっちりと分けておけばそうなるけど、ならないから。すごいことだよ、これは。

近藤 災難に逢った人にはちょっと言えないですね。

中野 それが逢った人に言ったんだからねえ。(笑)

近藤 それは良寛さんだからっていうのが…

中野 それはそうだね。僕が言ったら怒られちゃう。(笑)

近藤 ということで時間も迫ってまいりました。まだまだ皆さんからたくさん質問をいただいていたんですが、大変申し訳ありませんでした。最後に、これだけは聞いておきたいっていうことは…あ、はい、そこの水色のスーツの方。

質問者 ほとんどのことについては、お聞きしたかと思うんですけども、今是非お聞きしたいと思いますのは、中野先生に一つ、北嶋先生に一つありますが、今ここにいる私たちの平均年齢というは、かなり高いものがあるかと思うんですけども、もしここに高校生、大学生がいっぱいっていう状態であつたら、中野先生はまず何をおっしゃいますか、ということをお聞きしたいです。それから北嶋先生には、先ほどの学生たちのアンケート、読んでくださったところ、大変私も同感するところがあつて感動いたしました、どんなふうな導き方で、あのような文章が出てきたのかというところを、お尋ねしたいと思います。よろしくお願いします。

中野 僕はここに若い人がいたらね、さっきの五つのうちの一つ、「ゼロに身を置く訓練をせよ」ということを教えたいと思う。自分で指示して一週間なら一週間、粗食をし、テレビも携帯もない生活をし、そして僕みたいに板の上に寝て、板の上に寝ると体にいいからね、とにかくできる限りそういうふうな生活を一週間なら一週間に限ってやってみればいい。そしてその代わり一日三食、それも間食はしない、腹が減ったら食うっていうんじゃない、三食きちんと食うという、そういう単純なことでいいんだよ。それで自然の中に入って、そういう生活をすれば。とにかく僕は今の人には、ゼロに身を置く訓練をなさ、と言いたいな。

近藤 では、北嶋先生。

北嶋 私が<sup>きょうべん</sup>教鞭を執る大学では、「ゼミ」で良寛を扱っている教員や、「日本文化史論」講座で良寛を取り上げている教員、あるいは外国人の教員の中でも、良寛の俳句の英訳を学生と共に取り組んでいる教員もいます。あるいはまた、「良寛の里」スタディ・ツアーなどのイベントを実施してくださる先生もいますし、良寛さんに興味を持っている学生もだんだん出てきたのかなという感じもします。学外の著名な良寛研家から論文指導を受けて、立派な卒業論文をものして卒業した学生もいます。私は時々、貞心尼が死ぬまで秘めおいた歌稿（遺墨）として、柏崎市の中村家に秘蔵されてきた「恋は学問の妨げ」（恋学問妨）というのがありますが、良寛さんと貞心尼のこの唱和の和歌をディベートに使うことができます。さっき中野先生がおっしゃったように、一言でいえば、良寛さんは「語らざる人」であったわけですね。その語らざる人をディベートの題材として使うというのは大変難しいんですけど、貞心の

いかにせむ 学びの道も 恋草の 茂りていまは文<sup>ふみ</sup>見<sup>う</sup>るも憂し

という問いかけに対して、それを良寛さんはきちんと受け止めて、汗牛充棟<sup>かんぎゅうじゅうとう</sup>という漢語を和風化するの良寛さんの得意とするところですが、非常にきれいに和歌にして、

いかにせん 牛に汗すと思ひしも 恋の重荷を 今は積みけり

というふうに答えているわけです。最初こそそれぞれの温度差があって、学生諸君は遠慮がちですけど、最後になると大変熱中して、時を忘れるくらい興奮して語ってくれることがあります。つまり良寛さんの歌を、自分の体験に引き寄せて、恋は勉強の妨げになるのかどうかというふうに考えるのだと思います。この会場にお集まりの特に若い人たちに熱いメッセージを送るとすれば、良寛を学ぶのは、今が一番よい時期だと思います。日本の良寛ブームが続いておりますし、良寛関係の良書が次々と出版されています。新潟市にも良寛の書物の発刊を特色とする出版社があります。折々の講演会も充実していますし、至る所に「良寛会」の組織があり、良寛顕彰の運動があります。東京では良寛学の「博士」の学位を出す大学さえも出てきた、と聞きました。これを契機として、どうぞ若い皆さんに、これからも積極的に良寛さんのイベントに参加していただきたいと思う次第です。

近藤 今日では作家の中野孝次先生、そして敬和学園大学教授の北嶋藤郷先生をお迎えいたしまして、「新潟の文化を考えるフォーラム」私たち現代人の生き方にとって一体良寛さんとは何だろう、をお送りしました。限られた時間ではありますが、お二方から貴重なご意見をいただきました。どうもありがとうございました。(拍手。中野氏、北嶋氏退場。)

新潟県民文化祭2003「新潟の文化を考えるフォーラム」、長時間にわたりお聞きいただきまして誠にありがとうございました。今日のお話から、皆様の心に一つでも留めていただけるようなものがあれば幸いです。本日はお足元の悪い中、お越しいただきまして誠にありがとうございました。

## あ と が き

2003年9月21日の午後、新潟県民文化祭2003「新潟の文化を考えるフォーラム」が新潟市民芸術文化会館「りゅーとぴあ」劇場で開催された。主催は新潟県民文化祭実行委員会であり、このフォーラムのテーマは「現代人の生き方にとって良寛とは何か」―今、改めて良寛さまの「優游の心」に学ぶ―であった。

パンフレットのキャッチフレーズ (catch phrase) には、「心の豊かさが求められている今、生涯純粹で優しい心を持ち続け、寛容・無欲であり、人間と書と詩歌を愛した「良寛」が目注かれています。このフォーラムでは、新潟県を代表する文化人の一人であり、郷土の偉大な先人である「良寛」をテーマとし、中野・北嶋両氏の対談を通じて、「良寛」という大きな人間像を伝え、現代人が心豊かに生きるための方法を再発見します」とある。

「対談」は中野孝次氏と北嶋藤郷、司会はフリーアナウンサーの近藤京子氏であった。中野孝次氏は高名なドイツ文学者であり作家。現在は神奈川文学振興会理事長。『ブリュールへの旅』で日本エッセイスト・クラブ賞、『麦熟るる日に』で平林たい子文学賞、『ハラスのいた日々』で新田次郎文学賞、『暗殺者』で芸術選奨文部大臣賞に輝く。良寛関係書では、エポック・メイキング (epoch-making) な著書『清貧の思想』をはじめ、『良寛の呼ぶ聲』、『良寛に会う旅』、『風の良寛』、そして『良寛心の歌』などで知られている。

中野氏の『清貧の思想』が理論編であるとすれば、『人生のこみち』はその実践編というべき書物であるが、最終章の「遊戯の人、良寛」の中で、氏は、良寛を「この世の生存

形態として何者かであることを断じて拒み、何者でもなく生きた」人物として、「ただ人間であることにすべてを賭けた人を、わたしは良寛のほかに知らない。また全的にただの人間であることの美しさ、たのしさを、彼ほどみごとに実現して見せた人も稀であろう。そこが後世のわれわれにいつまでもこの人を慕わせる理由かもしれない」と語っている。ぼくは全面的にこれに共感するものである。

老子の考えや生き方をタオイズム、それに従って生きる人をタオイストと呼ぶが、老子のシンプル・ライフや「争わない、欲張らない、人の後から歩く」といった言葉に、ぼくは年を重ねるごとに惹かれるようになった。若い頃は反撥しか感じなかったものがようやく理解できる年頃になった、というべきか。唐木順三は「良寛にはどこか日本人の原型のようなところ、最後はあそこだというようなところがある」といっているが、今ではこれも納得が行く。良寛は托鉢によって生活し、人々に法を説かず感化を与え、深い尊信を受けた。良寛の和歌は格調高く、自在純真であり、書は風韻に富んでいる。わけても良寛の生き方と考え方は、現代人の人生局面で、心の糧となるに違いない、とぼくは確信している。

回首すれば平成12年5月20～21日、「良寛170年祭」（新潟市・全国良寛会主催）の行事として、世界初の「良寛国際シンポジウム」（新潟市民芸術文化会館コンサートホール）が開催された。

座長は同志社大学名誉教授・竹中正夫氏、総合司会は本学の延原時行教授、基調対談は良寛研究家・加藤僖一/谷川敏朗両氏、そしてシンポジウム「世界は今、良寛に何を学ぶか」では、芥川賞作家・新井満氏をはじめ、フランス、ロシア、中国の良寛研究者が一堂に会した。米国を代表して、本学のS.ゴールドSTEIN教授（通訳は北嶋）が参加した。

続いて翌年の平成13年5月3～4日、中国・北京大学において「第2回良寛国際シンポジウム」（北京大学主催）が開催された。日本からは、新潟大学教授・加藤僖一氏と北嶋が研究発表をした。（北嶋の発表は「大愚良寛と中国」であった。）

平成14年9月30日～11月18日にかけて、敬和学園大学オープン・カレッジ「地球時代の良寛」（敬和学園大学主催：代々木ゼミナール新潟校）が開催された。講師陣は豪華で、良寛研究家である谷川敏朗、加藤僖一、松本市壽諸氏、そして本学からは、S.ゴールドSTEIN教授（通訳・北垣宗治学長）、延原時行教授、荒井巍客員教授が参加した。

平成15年9月21日の作家中野孝次氏と北嶋の対談「現代人の生き方にとって良寛とは何か」（新潟市芸術文化会館「りゅーとぴあ」劇場：新潟県民文化祭実行委員会主催）は「対談録」として、この「年報」に掲載されている。

郷土の偉大な先人である良寛顕彰の上記のようなイベントを契機として、敬和学園大学において「良寛学会」設立の機運は、まさに熟していると考えられるものであるが、いかがだろうか。

## 付記

日本芸術院は平成16年3月25日、卓越した芸術作品や芸術の進歩に顕著な業績が認められた人に贈る2003年度日本芸術院賞に、小説家中野孝次氏ら13人を選んだと発表した。3月26日（金）付けの『新潟日報』紙によれば、「ベストセラー『清貧の思想』で知られる中野さんの受賞対象は、『風の良寛』、『中野孝次作品（全十巻）』、『ローマの哲人セネカの



言葉』。西洋文学の研究者でありながら、日本文化における豊かな精神の在り方を追求した功績を高く評価している。」とある。中野孝次氏は、特に優れた人に贈られる恩賜賞も併せて受賞する。(受賞式は6月7日、上野の日本芸術院会館で行われる。)

当日の「フォーラム」の内容については、新潟市長の篠田 昭氏が「市報にいがた」(平成15年10月5日)の市長随想ひこうき雲 (9)「良寛さんに何を見る」に詳しく感想を述べています。

雑誌『良寛』44(考古堂)には、この「フォーラム」の前半が特集2として掲載されています。同誌には、中野孝次先生の連載エッセイ「良寛つれづれ」(2)として、「ゼロに戻る訓練」も載っています。

また、中野孝次先生のドイツ文学の愛弟子で新潟眼鏡院社長・上田茂氏と考古堂書店会長・柳本雄司氏からは、この企画の当初から格別のご指導をいただきました。両氏のご厚情に感謝いたします。(敬和学園大学に「中野孝次文庫」があるのは、上田氏を介して中野先生から寄贈されたものです。)

「対談」の全文を敬和学園大学「人文社会科学研究所年報」に掲載することを快諾いただいた、中野孝次先生と近藤京子氏、そして人文社会科学研究所所長の石川喜一教授に感謝いたします。この原稿は新潟県県民生活・環境部文化振興課の山田富美子・熊川拓也両氏が「対談」のテープから活字におこしてくれました。両氏の労作に感謝いたします。写真提供は、新発田市在住の良寛研究家の星野淳雄氏のご好意によるものであります。

最後になりましたが、中野孝次先生にご紹介いただいた良寛研究家の松本市壽氏と「良寛さんアンケート」に快く回答してくれた、100名の敬和学園大学の学生諸君に対しても感謝いたします。(「対談」で話したままなのは、文章にならない箇所もあるので、部分的に加筆訂正したところもあります。)

(北嶋藤郷 本学教授 英語文化コミュニケーション学科長)